

公表用論文要約

フォークナー語りの力 ―その創造性の起源へ

梅垣昌子

ウィリアム・フォークナー（1897-1962）はアメリカの南部ミシシッピ州で生まれ、南北戦争の英雄を曾祖父にもつ。故郷をモデルとした架空の土地「ヨクナパトーフア」を主な舞台として作品を残し、その数は長編で20近く、短編や脚本などは未発表のものも含めるとゆうに100を超える。冷戦期の1955年には米国国務省の文化親善大使として来日し、日本の文人たちに鮮烈な印象を残した。敗戦後10年が経過した日本で人びとに親近感を与えたのは、ノーベル賞作家としての名声が高まるなか、フォークナーが折りにふれて用いた「農夫」のペルソナだった。フォークナーは若い頃から複数のペルソナを使い分けており、20代の頃は「洗練された空軍士官」として、第一次世界大戦での名誉の負傷を装ったり、戦後はニューオーリンズ経由でヨーロッパに渡って、「ボヘミアンの芸術家」のペルソナを好んだりした時期もあった。しかしそのいずれを組み合わせても、フォークナーの実像を正確に言い当てることは困難である。この変幻自在の作家像は、彼が描く作品世界の重層性とも呼応している。フォークナーは、真実を一元的に捉えることの難しさ、あるいはその無意味さを深く認識していた。彼が複雑な語りの方と独自の文体を獲得するに至ったのも、まさにその一元性を回避するためだったと考えてよい。

本論文では、難解と言われることの多いフォークナーの作品群へのアプローチとして、作品ごとに最適化された語りの方とに着目し、その語りのメカニズムこそが、彼の帰属するアメリカ南部社会の複雑な人種とエスニシティの相互の関係性と問題点をあぶり出すにあたり、極めて有効に機能する装置であったことを解明する。フォークナーは、「何を語るか」を重要な出発点としつつも、「それをいかに語るか」に極めて強い拘りを示し、語彙の選択や文構造の特徴、メタファーや伏線の仕掛けをはじめ、語り手の設定方と、視点のコントロール、時間と空間の断片化や伸縮、史実と仮構のシームレスな接続などの掛け合わせと試行錯誤により、緻密で躍動的な語りの力を自家薬籠中のものとした。フォークナーの語りの考察に関しては多くの先行研究が存在するが、それをふまえて本論文が特徴とするのは、語りのテーマをめぐって次のような手段を用いたことである。

本論文の特徴は第1に、フォークナーの3つの側面、すなわち詩人、作家、脚本家としての側面に着目し、これまであまり顧みられることのなかった脚本家としてのフォークナーにも光を当てたことである。そのうえでフォークナーの語りの手法が、これら3つの総合的かつ相補的な相乗効果により発展したことを明らかにしている。第2の特徴は、フォークナーが詩の次に重きを置いた短編小説に焦点を絞り、とりわけ人種とエスニシティを扱った作品に着目して、綿密な分析を行ったことである。フォークナーによれば、芸術性や技量の高さの要求度という観点から、最高峰は詩、次に短編、そして最後に位置するのが長編だという。彼にとって短編小説は、緻密な構成力と芸術的な手腕が試される、重要な表現形式であった。第3の特徴は、フォークナーがその作品世界の構築において目指した「統一的な設計図」を念頭におきつつ、土地、時空間、視点、起源というキーワードのもとに4部構成をとり、作品執筆の時系列を遡る形で創造性の起源に迫ることによって、原点としてのニューオーリンズ時代に語りの手法の萌芽を見出すべく、

道筋をつけたことである。なお各部の冒頭と締めくくりには、そこで扱う作品の歴史的および文化的事象に関する考察を置き、フォークナーの創造世界と現実世界の接点の所在を明確化した。

本論文の各部の詳細は、次のとおりである。まず序論にあたる部分では、フォークナーのトポスとしての「ヨクナパトーフア」の語源とアメリカ南部社会の概要について、人種とエスニシティの観点から説明したうえで、フォークナー文学の根幹を支えているのは、詩的想像力と語りの力という堅固な2本柱であると述べ、前者は、若い頃に詩の道を志していたフォークナーが育んだ貴重な能力であり、後者は、ニューオーリンズでの体験を契機に花開いたストーリーテラーとしての才能に、脚本家の技術が一層の磨きをかけたものであるとの考え方を提示している。またフォークナーのモダニズム小説の嚆矢であり、彼自身が「華麗な失敗作」と呼んだ『響きと怒り』に言及し、その4つのセクションにはそれぞれ、フォークナー文学の語りの方をめぐると原型的な4つの要素、すなわち、①カメラの目と時空間の多重露光、②哲学的な抒情性、③軽妙な通俗性、④秩序の希求、という特徴が織り込まれていることを指摘している。

次に第1部「土地」では、ヨクナパトーフアの共同体に注目し、人種問題をテーマとした作品について論じている。具体的には、フォークナーの『短編集』の「村」の部に収録されている作品から、第1章では「あの夕陽」を取り上げ、白人の子供たちと黒人女性の交流の物語を黒人音楽のブルースとの関連性に触れつつ論じている。その子供たちというのは、『響きと怒り』に登場したコンプソン家の3人のきょうだいである。まずブルース揺籃の地であるミシシッピ・デルタの変容について説明したあと、物語の二重性に触れ、そこに21の謎が含まれているという批評家の見方や、編集者H・L・メンケンの「最善の判断」を精査したうえで、本作品における語りの「ゆらぎ」について考察している。さらに黒人霊歌とブルースのエートスについて説明し、フォークナーが、白人の視点で黒人の物語を描くことの限界を前提としつつも、その規範とは別次元に存在する南部黒人の生のありようの核心を捉え、独特の語り装置を用いて可能なかぎりそれを追求したと結論づける。第2章では、同じく『短編集』の「村」の部から「乾燥の九月」を取り上げ、ヘイトクライムを生んだ共同体のメカニズムについて論じている。奴隷解放後のアメリカ南部社会において、町の閉鎖空間を駆けめぐる「うわさ」と、そこで起こる私的制裁の行方について説明したあと、作品中に繰り返される「トワイライト」のモチーフに着目し、そこに包まれた地域性が、局所的でありながらも普遍性を獲得しているという逆説的な真実に触れる。また白人男性間で行われる会話劇の分析と、共同体の周縁に位置する女性、さらに、援護から加害に転じる白人男性の心理に着目し、巧みな構成力によって共同体の暗部に光を当てたフォークナーの語り手法を前景化する。そのうえで、ジェンダーと人種のいわば交差点を描いた本作品において、フォークナーが詩的なイメージを豊富に織り込み、事件の背景を暗示的に描き出すことによって、共同体を突き動かす負の原動力を複合的に提示することに成功したと結論づける。第3章では『行け、モーセ』の一部に組み込まれた「黒衣の道化師」に注目し、黒人の登場人物が、イタリアのコメディア・デラルテの道化師に重ねて描かれていることを考察する。また本作品が、『行け、モーセ』の要となるメタ・ストーリーとして位置づけられるという解釈に触れたうえで、この物語の二部構成に注目し、冒頭にみられる状況描写を精査する。その結果として、アメリカ南部の白人と黒人が、土地と言語を共有しながらも全く異なる次元の世界に生きているという実情を示すにあたり、フォークナーが本作品で採用した語り手法が、極めて効果的に機能していることを指

摘している。

次に第2部「時空間」では、南部の問題を歴史的な視座から捉え、アメリカ先住民が登場する作品を扱っている。ここではフォークナーの作品において、時間と空間の概念が自在に再構成される過程を観察し、そのことによって歴史の新しい意味が生み出されることに注目する。具体的には、フォークナーの『短編集』の「荒野」の部に収録されている短編から、第4章では「紅葉」を取り上げ、アメリカ先住民に関する歴史の「編集」の背景について論じる。この章ではまた、「求愛」という作品にも視野を広げることにより、一連の「インディアン物語」をヨクナパトーファの年代記として捉え、その総体を横断的に考察している。変幻自在に伸縮する家系図や、定まらない部族名に注意しつつ、語りの時系列の対比をテキストに沿って詳細に分析することにより、史実と虚構の混淆である「インディアン物語」の中でも重要な一角を占める本作品が、壮大な風刺のドラマとして成立することを明らかにする。とりわけ追跡する「インディアン」と、逃亡する黒人奴隷を対位的に語る方法が、重要な意味をもつことに着目する。作家としての活動の初期よりフォークナーが継続的に描いてきた白人旧家の没落の物語は、アメリカ南部の人種問題と深く関係するが、フォークナーにとって「荒野」という舞台は、この問題を全く別の次元から眺めるための緩衝地帯として機能したことを指摘している。第5章では「正義」を取り上げ、アメリカ先住民と黒人奴隷との関係性を視野にいれつつ、「公正な」裁きの内実を論じる。入れ子構造をなす語りの手法や、その構造のなかに折り畳まれた時間の経過に着目し、先住民の首長の権勢と、その裏側に潜む疑惑を解明する。また物語の外枠にあたる部分で語り手の役割を担っている、『響きと怒り』のクエンティンの状況にも視野を広げ、本作品が「物語が語られ、理解され、そして新たに語り継がれてゆく営み」についての物語になっていると結論づけている。第6章では「見よ！」を取り上げ、ワシントンの議会議事堂を「襲撃」するアメリカ先住民と白人大統領の駆け引きを観察しつつ、そこに挿入された喜劇性を論じる。またこの物語のもつ現代性にも触れたうえで、本作品がフォークナーにしては新しい路線の風刺とファンタジーに仕上がっている点に注目し、土地所有をめぐる騒動とホワイトハウスの駆け引きについて詳細に論じたうえで、登場人物のモデルとなったジャクソン大統領と、チョクトーの首長だった実在の人物グリーンウッド・レフロアに言及する。随所に埋め込まれた鏡像のイメージと、それを戯画的に反復する語りによって、本作品は古今東西を問わず、優越的な「覇者」とその仮想敵たる「他者」とのせめぎ合いを俯瞰的に構造化したものと解釈できると結論づけている。

次に第3部「視点」では、主として戦争をテーマとする作品を扱い、フォークナーの複眼的思考の背景にある視点の問題と、情景を緻密な言語で可視化する映像的な描写に着目する。第3部ではヨクナパトーファ・サーガからしばし目を転じ、脚本家としてのフォークナーにも注目する。具体的には第7章で、『短編集』の「中間地帯」の部から「山の勝利」を取り上げ、プアホワイトとアメリカ先住民の物語における視点の切り替えについて論じる。本作はテネシーの山間部を舞台とする物語であるが、改訂によって作品構造が緊密化したことを説明したうえで、語りの特徴として、セクションの進行にともなう視点の移動と、主人公ウェデルの多角的な客観描写と内面への潜入という現象を取り上げ、その延長線上において終幕のカタストロフィがいかに効果的に組み込まれているかを考察する。プアホワイトの一家が、チョクトーと白人の血を引く南軍の将校ウェデルに向かって発した「黒人」という言葉は、差別意識と偏見に縛られた

プアホワイトの一家を駆りたて、結果としてウェデルの命は暴力的に剥奪されるのであり、その命を奪った銃弾は不条理のシンボルとして刻印されることになる。第8章では『短編集』の「荒地」の部から「勝利」を取り上げ、往復する時間軸、移動する視点とエピソードの並置、口髭のシンボリズム等に注目し、本作品が多様な語りの装置を用いて精巧に構成されていることを明らかにしている。第一次世界大戦を重要な枠組みとして、伝統に誇りをもつ家族を描き、その末裔が自己実現にもがく姿を提示する本作の人物設定は、『響きと怒り』のコンプソン家とも重なる。これをふまえ本作は、南北戦争の英雄譚を聞いて育った「失われた世代」のフォークナーが、勇気の陥穽と英雄の転落のメカニズムを描きだしたものと結論づけている。第9章ではフォークナーが脚本制作に関わった映画『永遠の戦場』を取り上げ、脚本の仕事が作家としての活動に新たな視点を導入した可能性を指摘している。無名兵士の物語を原作にもつフランス映画『木の十字架』を下敷きにして、ハリウッド映画を生み出すにあたり、ハワード・ホークス監督の要請に応じて脚本執筆に携わったフォークナーは、映画作りの「ドクター」を自称していた。脚本の手書き原稿の存在に触れたうえで、脚本執筆時のフォークナーの状況と、脚本内部の設定との間に見られる呼応関係を詳しく検証すると同時に、『アブサロム、アブサロム!』や『寓話』との接点も視野に入れて、小説と脚本の仕事の相乗効果、あるいは故郷オクスフォードとハリウッドをめぐる想像力の循環が、フォークナーの創作エネルギーの大きな源泉になったと結論づけている。

次に第4部「起源」では、これまで論じてきたフォークナー作品の技法や思想の根源を追究し、芸術家の誕生の契機を明らかにすべく、作家にとって強烈な異文化体験となったニューオーリンズ時代に注目する。具体的には第10章において、アメリカ先住民に関する物語とニューオーリンズとの関連性を論じる。第11章と第12章では、フォークナーの初期の小品「ニューオーリンズ」を取り上げ、詩人として出発したフォークナーが駆使するシンボリズムについて考察したうえで、フォークナーが11人の語り手を生み出し、それらを内面化して豊饒な作品世界を構築するに至った道筋を検証する。「ニューオーリンズ」において、後の小説に現れる登場人物たちの原型をつかみ、詩人としての感性に突き動かされて数々のスケッチを試みたフォークナーは、登場人物たちのエネルギーを制御する方法について模索の段階にあった。彼はその後、多様な作品群を次々に世に出す中で、その屋台骨とも言える緻密な語りの技法を完成させ、架空の土地ヨクナパトーフア郡の重要な構成員を次々に創造していったのである。

本論文では付録として、フォークナーの主な著作一覧、短編集等の収録作品一覧、ヨクナパトーフアの地図3種、およびフォークナーの作品世界をウェブ上で多角的に検索できるプロジェクト「デジタル・ヨクナパトーフア」の概要を掲載した。